

胡隱君を尋ぬ

高

啓

水みづを渡わたり復また水みづを渡わたり

花はなを看み還また花はなを看み

春しゅん風ふう江こう上じょうの路みち

覚おぼえず君きみが家いえに到いたる

【作者】

高 啓

(一三三六〜一三七四年) 名は啓(けい)、字は李迪(りてき)、江蘇省長州(蘇州市)の人、幼にして穎敏(えいびん)、文武に優(すぐ)れ、詩文に巧みで史学に深かった。呉淞の青丘に住み、青丘子(せいきゆうし)と号す。元

朝に抵抗して蘇州に政権を樹立した張士誠の文学集団に出入りした。官は戸部(こぶ)侍郎に就(つ)くも辞(や)めて自活、のち罪に連座して処刑される。時に三十九歳、明(みん)初期 最大の人で呉中の四傑「楊基(ようき)、張羽(ちやうう)、徐賁(じよひ)」に数えられる。

【語釈】

*胡隱君：胡は姓 隱君は隱棲(いんせい)している人

*水：川の意

*江上：川のほとり。

【通釈】

何度も何度も川を渡る道すがら、花を見、さらに咲きほこるあたりの花を見る。

春風そよぐ江(かわ)のほとりの路をゆくと、いつの間にか君の家にとどり着いてしまった。